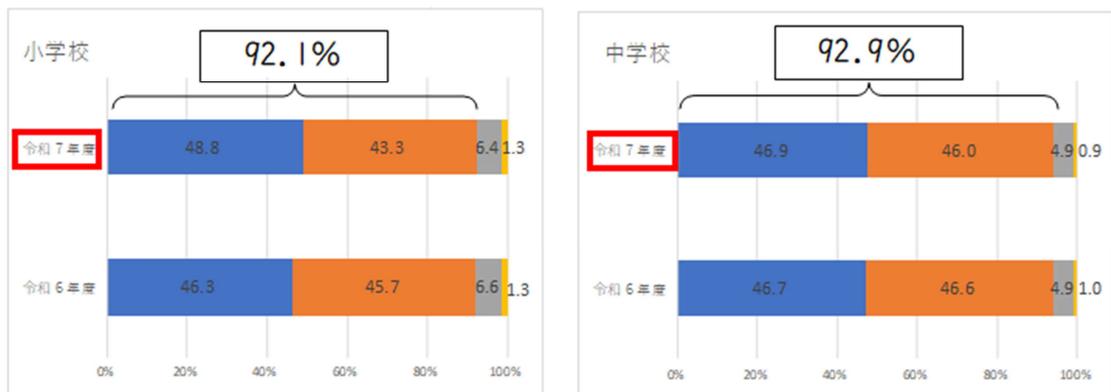


2 「授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか」という質問に9割以上の子供が肯定的な回答をしている。これは、協働的、対話的な学びを通して、自分と異なる意見に触れる機会が増え、対話が新たな視点や気づきを与えてくれるものだと理解し、他者と協働することのよさを体験的に学んだからだと考えることができる。

授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか



静岡県経年変化 (R6からR7)

協働的、対話的な学びの機会が増えている。

## 教師用指導資料に照らして

令和版 自分ごと（自分の事）として学ぶ子供



### 3 調査研究事業における取組

#### (1) 実施要領

---

「未来を切り拓く人材の育成と社会を生き抜く力を育む教育の実現」に向けた授業づくり、学級づくり調査研究事業実施要領

静岡県教育委員会

#### 1 趣旨

静岡県教育委員会（以下、「県教育委員会」とする。）は、調査研究推進地区教育委員会（以下、「推進地区教育委員会」とする。）及び調査研究指定校（以下、「指定校」とする。）との連携・協力の下、「未来を切り拓く人材の育成と社会を生き抜く力を育む教育の実現」に向けた授業づくり、学級づくりを推進することについて調査研究を実施し、その成果の普及を図ることにより、小・中学校及び義務教育学校の児童生徒の資質・能力の育成に資する。

#### 2 目的

全ての児童生徒に目指す資質・能力を育成するための授業づくり、学級づくりについて調査・実践・研究を行い、成果・課題を明らかにする。

#### 3 指定期間

令和7年4月1日から令和9年3月31日までの2年間とする。

※令和8年4月1日から令和9年3月31日までの1年間は、令和8年度予算の確保状況により「7 経費」の内容に変更の可能性がある。

#### 4 事業の指定

県教育委員会が、静東教育事務所管内及び静西教育事務所管内のそれぞれに小学校及び中学校1校ずつの計4校を調査研究のための指定校とする。ただし、1中学校区のすべての小・中学校を指定する場合に限り、小学校が2校以上になることも可とする。

また、指定校を所管する教育委員会を推進地区教育委員会とする。

#### 5 事業の実施内容

本事業においては、「1 趣旨」に基づき、指定校において、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図りながら、子供たちのウェルビーイングにつながる授業づくり及び学習の基盤となる学級づくりを行うことを通して、三つの柱で示されている資質・能力をバランスよく育成することを目指した取組を計画し、実践する。

(1) 県教育委員会においては、次のことを行うものとする。

ア 学力向上推進協議会を設置し、推進地区教育委員会及び指定校に対して、本事業の円滑な実施のために必要な指導・助言及び成果の検証を行う。

イ 指定校に対して、学力向上推進協議会によるサポートチームや教育事務所教育主幹等を派遣し、必要な指導・助言等を行う。

(2) 推進地区教育委員会においては、県教育委員会における実施方針に基づき、次のことを行うものとする。

ア 指定校に対し、本事業の円滑な実施のために必要な指導・助言等を行う。

イ 指定校に対し、成果の発表等への支援を行う。

ウ 指定校の取組や成果等を市町内の各学校へ周知する。

エ 学力向上推進協議会に出席し、調査研究への支援状況等を報告する。

(3) 指定校においては、県教育委員会における実施方針や推進地区教育委員会の指導・助言等に基づき、次のことを行うものとする。

ア 「1 趣旨」や各学校の状況等を踏まえて、調査研究テーマを設定する。

イ 調査研究成果を検証するための成果指標を設定する。

- ウ 調査研究実施計画を立案する。
- エ 調査研究テーマに沿って、資質・能力の育成を目指した取組を計画し、実践する。
- オ 調査研究の成果を検証する。
- カ 学力向上推進協議会に出席し、調査研究の状況等を報告する。

## 6 実施計画書等

- (1) 推進地区教育委員会及び指定校は、第1年次の始めに実施計画書、第1年次の終わりに中間報告書、第2年次の始めに実施計画書、第2年次の終わり（事業の終了時）に実績報告書を提出するものとする。
- (2) 実施計画書等の様式その他必要な事項については、県教育委員会から別途連絡する。中間報告書、実績報告書は、学力向上推進協議会報告書として、県教育委員会義務教育課のWeb ページに公表する予定である。

## 7 経費

県教育委員会で負担する謝金及び旅費は以下のとおりとする。

- (1) 学力向上推進協議会からのサポートチームの派遣は、各学校年間2回以内とする。ただし、1中学校区の小・中学校が指定校の場合には、1中学校区年間4回以内とする。
- (2) 教育事務所教育主幹等による支援研修等は、各学校年間3回以内とする。ただし、1中学校区の小・中学校が指定校の場合には、1中学校区年間6回以内とする。
- (3) 指定校が招聘する大学教授等講師の派遣は、各学校年間2回以内とする。ただし、1中学校区の小・中学校が指定校の場合には、1中学校区年間4回以内とする。
- (4) 研究発表会の実施に係る諸費用や学校職員の県外視察等にかかる旅費等については、推進地区教育委員会及び指定校負担とする。

## 8 会計年度任用職員

- (1) 本調査研究を推進する教員（研修主任等）の負担軽減のための非常勤講師を配置する。  
1人あたり10時間/週×35週、2,860円/時間、通勤手当週5日分で算定
- (2) 第1年次、第2年次ごとに実施計画書及び実施報告書を提出する。実施計画書及び実施報告書の様式その他必要な事項については、県教育委員会から別途連絡する。

## 9 調査研究成果の発表

指定校は、調査研究の2年目に調査研究の成果等を発表する。なお、調査研究成果の発表については、県教育委員会が定める「研究指定校等の研究実践及び成果の公表について」による。

県教育委員会は、指定校が行う2年間の調査研究後に、指定校の成果等をまとめたものを作成する予定である。

推進地区教育委員会及び指定校は、学力向上連絡協議会の際に、実践報告等を行う場合がある。

## 10 その他

- (1) 県教育委員会は、必要に応じ、本事業の実施状況等の把握のため、実態調査（指定校訪問など）を行う。
- (2) この要領に定めのない事項で事業の実施に必要な事項は、必要に応じ、県教育委員会が別に定める。

## (2) 指定校、推進地区教育委員会の取組（中間報告書）

### ア 富士市

#### (7) 富士市立青葉台小学校

## 1 調査研究内容

### (1) 調査研究テーマ

「個別最適な環境の中で協働的に学ぶ授業づくり  
～子供を主語にした単元デザイン～」

### (2) 目指す子供の姿

学校経営を支える教育理念は「はじめに子どもありき」である。どの子供もできるようにになりたい、分かるようになりたいという思いをもっているという肯定的な子供観をベースにしている。

子供を主語にし、個別最適な学びができる環境の中で、協働的な学びが実現する単元をデザインすることによって、子供は主体的・対話的で深い学びをすることができる。それは「未来を切り拓く人材」と「社会を生き抜く力」に通じると考えて研究を進めている。

社会状況の急速な変化、多様性の拡大、生成AIをはじめとするデジタル技術の飛躍的な発展など、予測困難な未来を切り拓いていくためには、「自己選択・自己決定・自己調整」をしながら、しなやかに行動することが必要だと考える。子供が見通しをもって自分に合ったペースや方法で学び方を選択・決定し、その過程や達成状況を振り返り、学びを進めていく姿を目指す。

同時に、よりよい社会をつくるため、多様な人々と共に考え、課題解決に向けて行動を起こしていく力も育てていきたい。教師自身がつけたい力を明確にし、子供同士はもちろん、地域社会のひと・もの・こと、他教科等や生活とつなげたカリキュラムマネジメントを行う。その際、デジタル学習基盤は、未来を生きる子供にとって学びの環境の大前提となる。本校は情報活用能力の育成に力を入れて4年目となる。積み上げてきた強みを大切にしていく。

### (3) 調査研究の重点

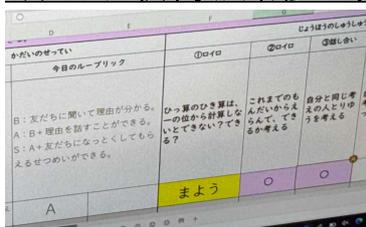
- ①子供の自走を支え、確かな力を育むための見取りと関わり
- ②個別最適な学びと協働的な学びの充実を目指した「子供を主語にした単元デザイン」
- ③情報活用能力の育成
- ④ユニバーサルデザインの視点に立った学びの見通しがもてる環境づくり
- ⑤安心して学べる学級・学校づくり「スクールワイドPBS」

## 2 取組の状況

月	内容	備考
4月	校内研修「研修の方向性共通理解」 23(水)校内研修「学びづくり部からの提案授業」	4年生 音楽科提案授業（筒井教諭） 6年生 全国学力学習状況調査 1～5年生学力標準テスト（東京書籍）
5月	学年研修	
6月	16(月)校内研修「三井一希准教授招聘研修」 25(水)吉原第二中学校区 小中合同研修会	全学級公開授業 3年生 算数科中心授業（稲葉教諭） 吉原第二中学校の授業参観 i-check（東京書籍）
7月	16(水) 常葉大学 赤塚めぐみ准教授 招聘 「調整が決め手！インクルーシブ教育プラスワン」 22(火) 研修の方向性の確認 23(水) i-check、標準学力調査の結果分析	赤塚先生には、月に数回学校訪問をしていただいている。 前期学校評価

7月	28(火)学校運営協議会「これからの授業、青葉台小の取組」についての説明	
8月	25(火)3年生以上全児童に向けて、「未来を生きる青葉っ子の授業」説明	
9月	5(金)全国学力・学習状況調査分析 10(水)学力向上推進協議会からのサポートチーム派遣及び教育事務所教育主査等における支援研修 静岡大学塩田真吾准教授招聘 8(月)富士市教育委員会学校訪問	全学級公開授業 1年生 国語科中心授業(佐野教諭) 4年生 特別活動中心授業(野中教諭)
10月	富士地区教育研究協議会研修会	
11月	12(水)富士市一斉授業研修会(5年生家庭科・6年生理科) 26(水)吉原第二中校区 小中合同研修	5年生 家庭科研究授業(宮崎教諭) 6年生 理科研究授業(塚本教諭) 今泉小学校の授業参観 後期学校評価
12月	1(月)校内研修「三井一希准教授招聘研修」 11(木)授業参観「これからの授業、青葉台小の取組」の説明動画を公開	全学級公開授業 市内小中学校対象に自主公開研修 6年生 社会科中心授業(岡村教諭)

### 6月16日(月)校内研修「三井一希先生 招聘研修」



3年生算数科「たし算とひき算」  
クラウドアプリで学習の進捗状況を共有し、相手を選んで共に学んでいた。しかし、子供主体の単元デザインにするには課題設定の工夫が必要だった。三井先生からは「やればできそう。」という期待と「知りたい、分りたい。」という価値を子供が感じられる課題を設定すること、また学校全体として文字でのアウトプットが多かったので、音声でのアウトプットも意識して増やすとよいとご指導いただいた。

### 7月22日(火) 夏季研修

4月からの実践を振り返り、これからの研修の方向性についての共有を図った。大きな修正は行わず、これまで続けてきたことを地道に取り組んでいくことを確認した。具体的には「教科の特質を生かして教科横断的に情報活用能力の育成を図る」「探究サイクルを意識して単元をデザインする」などである。「見取りと関わり」に関しては、自走している子供への伴走の在り方を課題にした。

学習アイコンと板書		過程	課題	形態	ツール
今日のメニュー	1時間や単元の流れを子供と共有する。				
今日のゴール	何をすれば1時間の授業の課題が解決するのか。(行動目標) (例)課題 縄文時代の日本人はどのような暮らしをしていたのかな。 ↓全体でまとめたまていかない!時間であれ! ↓ 今日のゴール どのような暮らしをしていたのか、気づいたところや疑問に思ったところに付箋を貼り、考えを書く。				
今日のポイント	何を意識して学習を進めると良いのか伝える。(各教科の見方、考え方を意識できるようにポイントを伝える。)				
本 など	学習形態の提案をする。「相手を選んで」、誰と学習するとどんなメリットがあるのか子供が理解して選択できるようにするための訓練が必要。すぐには無理。何度も失敗をする。でもそれを乗り越えないと身に付かない。また、まずは「一人」で学びをスタートさせる価値も伝えていかないとけない。でも一人だけでは見方、考え方に偏りが出る。どんなツールで情報収集と整理分析をするのか、「分かっているだろう。」と思わず、UDの視点からも提示する。				

### 7月23日(水) i-check・標準学力調査の分析

安心して学べる学級・授業づくりを目指し、子供一人一人の本音を引き出す総合質問紙調査 i-check (東京書籍) の結果を分析した。クラスの状態をマズローの欲求段階と参照して特徴を把握した。併せて、特に配慮が必要な子への支援の在り方を考えた。また2~5年生の標準学力調査(東京書籍)の結果も分析した。全体的に活用力、思考・判断・表現力が全国平均より劣り、学年が上がるにつれ、その差が開いていた。実態を踏まえて単元デザインをする必要がある。

本校の結果の特徴から見えてくる成果と課題を分析した。また、出題傾向から、今求められている学力の理解を深めた。

正答数分布グラフを見ると、3教科ともに2こぶラクダ型であり、上位層が少なく、下位層が多いことも顕著であった。質問調査では、自己肯定感が全体的に低い傾向の中、ICT機器については自信を持って活用しているという意識が見えてきた。

〈学習のこと〉 ※「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した数値です。

- 5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を毎日使用していたか？ 本校 92.2% 全国 56.7%
- あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って情報を整理する（図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる）ことができると感じますか？ 本校 70.2% 全国 69.3%
- 分からないことやよくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか？ 本校 79.2% 全国 81.7%

### 9月10日(水) 学力向上推進協議会からのサポートチーム派遣及び教育事務所教育主査等における支援研修

静岡大学の塩田真吾先生に授業参観をしていただき、ご指導を受けた。**情報活用能力の育成には、基本的な操作だけでなく、探究するスキルと情報モラルの三つの側面から指導する必要があり、単にICTを活用するだけでは力は育たないこと、また情報活用能力の育成が探究的な学びを深めるというお話を**していただいた。さらに、**AIが進化する中では探究の一部をAIに任せられるからこそ、人間が問いや課題を設定する重要性を再認識した。**加えて、**効率を重視する「ファストな学び」だけでなく、じっくり考え議論を重ねる「スローな学び」の価値**についても示され、単元デザインの重要な視点を得ることができた。

### 11月12日(水)富士市一斉授業研修会(5年生家庭科・6年生理科)

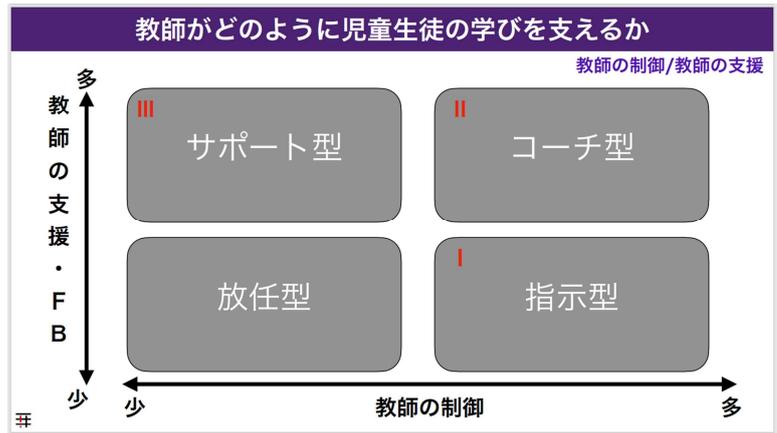


市内の先生方に5年生家庭科と6年生理科の授業を参観していただいた。**子供の思いを大切に**した単元デザインにより、子供の「やってみよう」という思いが引き出され、**単元を通して主体的に学ぶ姿**が見られた。**株式会社ユニクロによる出前授業や、子供が夢中になって学び、深い思考を促すクラウドアプリ**を用意するなど、家庭科のねらいに迫る学習環境を工夫した。

### 12月1日(月)校内研修「三井一希准教授招聘研修」市内小中学校対象に自主公開研修



市内約30名の先生方に授業を参観していただいた。全学級公開と6年生社会科の中心授業を行った。三井先生からは、**学びを支えるため、教師の制御と支援の軸から考えて単元をデザイン**していくことの重要性を教えていただいた。また**集団としてではなく、一人一人が探究のサイクルを回して自ら学びを進める姿**を目指すようにと助言をいただいた。これまで大事にしてきた見通しを持たせることの重要性も再認識した。



(出典：山梨大学三井一希准教授 2025. 12. 1 富士市立青葉台小学校校内研修)

### 3 成果と課題

- 学校評価児童アンケート（後期）において「自分にはよいところがある 71.9%」など自己肯定感は低い傾向にあるが、授業についての満足度は高く、前期よりも数値が上昇していた。授業づくりの成果である。

授業が分かる（児童 後期 93.3% 前期 92.6%）

友達と関わり合いながら授業をすることが楽しい（児童 後期 92.1% 前期 90.0%）

友達に自分の考えや意見が伝えられている（児童 後期 82.9% 前期 78.9%）

友達と関わる中で自分の考えを深めたり広めたりしている

（児童 後期 79.4% 前期 78.1%）

- 学校評価の教職員アンケート（後期）においても、子供と共に学び続ける伴走者として前向きな取組ができたと教師自身が達成感を感じていた。

研修を授業に生かすことができた（教師 100%）

主体的・協働的な学びの授業づくりをした（教師 100%）

子供が主語の単元デザインを工夫した（教師 100%）

情報活用能力の育成ができた（教師 94%）

- ICT 機器に慣れていない教師や本年度赴任した教師でも、授業で ICT を活用できるような研修の組織体制やデジタル環境が充実している。子供についても、

ICT 機器を活用している（児童 95.4%）

と、タブレット端末を日常の学習ツールとして活用し、自信をもっている。2年生もタイピングで文章を作成することが多く、どの学年においても、振り返りなどで長い文章を書き、様々な方法で表現し、情報収集・共有も効果的に行っている。デジタル学習基盤が前提である授業づくりは進んでいる。

- 学習しているように見えて、本当にどの子も学べているのかと疑問に思うこともあった。今後は、「量の多さ」から「質の高まり」を目指せるよう、丁寧に教師が見取り、関わっていききたい。

- 特別支援学級においても同様で、タブレット端末を効果的に使い、個別最適・協働的な学びを意識した授業改善を行っている。また、学級の授業に参加できない子供が、別室で友達と考えを共有して学習する姿もあった。

- 自走して学ぶ子供の探究サイクルを意識してきたが、「情報収集」から、「整理・分析」を十分に行った上で「まとめ・表現」を行うことが課題である。友達との対話や深い思考・判断を生む仕掛けを生み出したい。今後さらに生成 AI の活用が進むと、この傾向は一層強まることが懸念される。複数の情報源から情報を収集した上で、それらを整理分析する過程を重視し、適切に便利な生成 AI を活用できるように指導したい。
- 伴走者である教師の見取りと関わりについて研修を深めたい。授業を見合い、子供の姿・表情・言葉・語りから丁寧に見取る感覚を磨きたい。そして、その事実が何を意味するのか解釈し、子供に返していけるような指導・支援を学んでいきたい。
- 授業づくりの基盤となる安心した生活づくりについては、「ルールやマナーを大切にしている」（後期児童 91.2% 教職員 81.3%）児童と教師の数値の乖離が前期の 24%から 10%以内へと少なくなっている。スクールワイド PBS の導入の成果を感じる。
- スクールワイド PBS は、望ましい行動を育て、子供と教師の心理的安全性を高めるために学校全体で取り組んだ。行動目標を明らかにし、生徒指導として「できていること」「できるようになったこと」を認め、児童会活動として「子供自らが実践・承認する」を両輪で行ったことに効果を感じる。次年度に向けて、子供の声をさらに反映した行動目標を作っている。
- これからの授業づくり・青葉台小の取組を、3年生以上の児童、学校運営協議会委員、保護者それぞれに向けて研修主任がプレゼンテーションをした。これからの未来を見据えた授業改善について、児童・保護者・地域の方々にも理解してもらえる試みをした。
- 研究1年目の本年度は、スクールワイド PBS や「子供を主語とした単元デザイン」を新しく重点に取り入れたり、本校の取組を地域や保護者、他校の先生方に説明したりと多くの挑戦をした。次年度は、今年度の取組を洗練していく方向で考えている。

#### 4 その他

##### 次年度の計画

- ・令和8年12月1日（火）研究発表会 中心授業（授業数は未定）と三井先生の講演

(イ) 富士市教育委員会

1 指定校への支援内容

月	内容と支援	備考
4月	校内研修「研修の方向性共通理解」 23(水)校内研修「学びづくり部からの提案授業」 →校内研修に指導主事3名参加、授業参観、研修の方向性を共通理解。	4年生 音楽科提案授業 (筒井教諭)
5月	13(火) 県教委の『「未来を切り拓く人材の育成と社会を生き抜く力を育む教育の実現」に向けた授業づくり、学級づくり調査研究事業について』の説明。 →県教委の説明を聞き、調査研究事業を学校と確認し、目指すべき姿を共有。 →学力向上推進協議会サポートチームの訪問日程、教育事務所地域支援課の支援研修の日程等について等、学校と調整を行う。	県教育委員会 静岡教育事務所 富士市教育委員会 青葉台小学校へ訪問
6月	16(月) 校内研修「三井一希山梨大学教育学部附属教育実践総合センター准教授招聘研修」 →指導主事が訪問し、中心授業者へ指導助言等を行う。 →三井一希准教授の指導を学校と共に学ぶことで、方向性を揃え、今後の支援に活かす。 27(金) リーディングDXスクール指定校である吉田町立中央小学校の公開授業参観。青葉台小学校長・研修主任等と参加。 →先進校の取組を学校と教育委員会で参観し、授業づくりや研修の推進の仕方を学ぶ。	全学級公開授業 3年生 算数科中心授業 (稲葉教諭)
7月	25(金) 研修主任者会開催 →富士市教育委員会主催の研修主任者会を開催し、各学校の校内研修の質を高め、教職員の資質向上と組織的な授業改善を推進するためのリーダーを育成する。	講師：三井一希准教授
8月	7(木) 学校図書館研究大会(グランシップ)での発表 →指導主事も参加し、実践を共有する。	5年生 学校図書館主任実践発表 (福井教諭)
9月	3(水) 学力向上推進協議会からのサポートチーム派遣及び教育事務所教育主査等における支援研修 静岡大学塩田真吾准教授招聘 →指導主事も同行し、支援の方向性を揃える。 8(月) 富士市教育委員会学校訪問 →指導主事による指導助言	全学級公開授業 1年生 国語科中心授業 (佐野教諭) 4年生 特別活動中心授業 (野中教諭)

10月	3(金)リーディングDXスクール指定校である吉田町自彊小の公開授業参観。 →指導主事参加。先進校の取組を、指定校の指導助言に活かす。参考資料の共有。	
11月	10(月)12月1日の校内研修公開の打合せ →講師送迎・来校者案内等は市教委が分担し、学校と分業し、会が滞りなく進むよう計画する。 12(水)富士市一斉授業研修会 (5年生家庭科・6年生理科) →富士市教育委員会推進会推進員による指導助言	5年生 家庭科研究授業 (宮崎教諭) 6年生 理科研究授業(塚本教諭)
12月	1(月)校内研修「三井一希准教授招聘研修」 →指導主事による指導助言 →講師送迎・来校者案内等は市教委が分担し、自主公開が滞りなく進むよう支援する。 23(火)来年度(本発表等)の打合せ →指導主事が、来年度の県指定校研究発表に伴う年間計画を、学校と一緒に話合うことで、見通しをもつ。	全学級公開授業 市内小中学校対象に自主公開研修 6年生 社会科中心授業 (岡村教諭)

## 2 研究成果等の周知について

青葉台小学校の校内研修(12/1)を市内小中学校への公開【別紙参照】

個別最適な学びと協働的な学びの充実を目指した指導方法として、子供が自分の学習の進め方や方法を選択・決定して学ぶ授業を公開した。

## 3 その他

富士市教育委員会 第二次富士市教育振興基本方針

【基本目標】 明日を拓く 輝く「ふじの人」づくり

【基本方針】 「一緒に学ぶ 一生学ぶ」

施策 確かな学力の向上

### (1) みんなが学びの主人公になる授業づくりの推進

「みんなが学びの主人公」とは、「一人一人が自分ごととして課題に向き合い、自分らしさを発揮しながら課題解決に向かう中で、資質・能力を育てる授業」と捉えている。富士市教育委員会では、授業づくりの重点に示された3つの視点「『子どもと教材をつむぐ』単元を構想する」「『見取り』を生かし、仕掛ける」「『学びの実感』を次へつなぐ」を基に授業改善を行い、各種研修や学校訪問等を通して教職員の実践力が向上するよう支援する。

### (2) 習得・活用及び探究を意識した授業づくりの推進

富士市教育指定校(R7, R8 吉原小学校、吉原第三中学校、R8, R9 富士見台小学校、富士川第一中学校)と県の教育指定校(青葉台小学校)と情報を共有することで、より質の高い研究を実現する。

### (3) 多様性を受け入れ、個々のよさを認め合う温かな人間関係づくりの推進

人間関係づくりプログラム及びi-check活用のための研修会、生徒指導・特別支援教育・外国人児童生徒支援充実のための各種研修会の開催などとおして、子供一人一人が安心して自分の思いを表現することができる、温かな人間関係づくりを推進する。

【別紙】

令和7年11月4日

市内小・中学校長 様

富士市立青葉台小学校  
校長 田中 敦子

### 校内研修のご案内

秋冷の候、皆様におかれましてはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、本校は令和7・8年度の2年間にわたり、静岡県教育委員会から「未来を切り拓く人材の育成と社会を生き抜く力を育む教育の実現」に向けた授業づくり、学級づくり調査研究事業の指定を受け、研究テーマ「個別最適な環境の中で協働的に学ぶ授業づくり～子供を主語にした単元デザイン～」のもと、VUCAの時代に生き抜く子供の未来を見据え、「自走」できる子供と質の高い「伴走」をする教師が、ともに学び続けることができる授業づくり・学級づくりを目指して、研究を行っています。

つきましては、本研究を進めるにあたり核となる研修機会である、山梨大学の三井准教授を招聘しての校内研修を下記のとおり実施しますので、ご案内いたします。

### 記

- 1 行事名 富士市立青葉台小学校 校内研修
- 2 日時 令和7年12月1日(月)
  - ・一般公開授業 第3校時(10:30～11:15) 第4校時(11:25～12:10)
  - ・中心授業公開 第5校時(13:30～14:15)
  - ・事後研修、指導講話(14:30～16:20)
- 3 場所 富士市立青葉台小学校
- 4 参加者 富士市内小中学校の希望者



※ 月 日( )までに、左の二次元コードを読み取り、formsの「研究発表会参加申込みフォーム」画面から必要事項を記入し、各自申し込みをお願いします。

<https://forms.office.com/r/PtjFsPnWEF>

## 6 公開授業

- ・ 3、4校時：全学級一般公開（自由参観）
- ・ 5校時：中心授業公開 6年2組 社会科 「明治の新しい国づくり」  
授業者 岡村 篤 教諭（研修主任）

## 7 事後研修

- ・ 本校職員によるグループディスカッション（研究協議）
- ・ 指導講評  
講師：山梨大学教育学部附属教育実践総合センター  
准教授 三井 一希 氏

## 8 受付

正面玄関（無人チェックイン方式）  
（お手持ちのスマートフォン等の端末で二次元コードを読み取り、必要事項を入力していただきます。）

## 9 駐車場

体育館南側駐車場（学校西側道路から校内へ入ってください。）  
（当日の利用台数によっては、駐車場は変更になる可能性があります。）

## 10 その他

### (1) 指導演について

11月25日(火)までに、本校公開フォルダにデータを置きます。必要に応じて印刷してお持ちください。

### (2) 持ち物について

上履き・名札・校務PC

### (3) 本研修専用 Teams について

本研修関連資料の配信、及び事後研修グループワークの閲覧等に使用するため、本研修に参加登録をされた方を、自動的に専用 Team に登録させていただきます。

担当

富士市立青葉台小学校

教頭 米田 一也

教務主任 久保田崇之

電話 21-6310

## イ 沼津市

### (7) 沼津市立第三中学校

#### 1 調査研究内容

##### (1) 調査研究テーマ

「多様性社会における生徒・保護者・教職員の信頼関係形成  
～一人一人を大切にする教育の実現～」

##### (2) 目指す子供の姿

心理的安全性のもと、誰一人取り残されることなく、目標をもって、学校生活を送り、夢に向かって邁進する生徒。

##### (3) 調査研究の重点

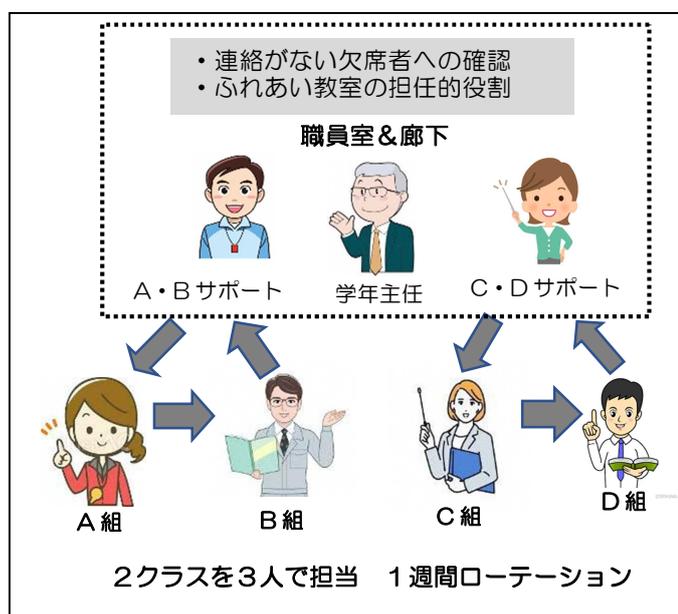
「誰一人取り残さない教育の実現」に向けては、生徒が取り残されないことはもちろん、生徒を支える教職員が取り残されないことも研究の重要な視点である。そのため、生徒と教職員双方の心理的安全性を高めることを重要視し、研究を進めていきたい。

#### 2 取組の状況

##### (1) 生徒参画の学校運営「チーム担任制」の導入

本校はチーム担任制2年目として、以下の体制を整えた。

- ・1学年4クラスを6名で担当し、1週間ローテーションで担任を交代。



- ・ベテラン、中堅、若手＋異性配置でバランスをとり、生徒理解の多角化を図る。
- ・窓口担当の導入により、教育相談や進路指導の一貫性を確保。
- ・情報共有体制の強化（木曜学年部会・金曜ローテーション開始）  
本校では、毎週木曜日を5時間授業＋学年部会とし、金曜日のローテーション前にチーム担任で必ず生徒情報を共有できる構造を整備した。

##### (2) 働きやすさと学び合う文化の形成

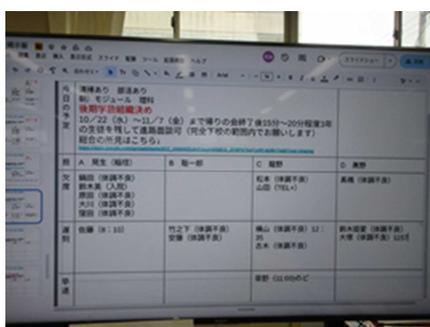
- ・教員の心理的安全性の向上とOJTの定着が進んでいる。

- ・若手教員が「担任ではない週」にベテランの指導を横で学ぶ場面が増加。
- ・年休取得の調整や、健康面での支援がしやすくなり、心理的安全性が向上。
- ・教員アンケートでは「働きやすい」という声が多数。また、一人で抱え込まない文化が育ちつつある。

～働きやすさ～

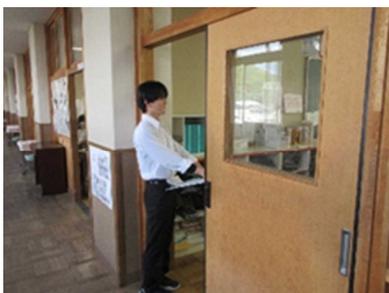


- ・木曜日に学年部会を行い、金曜日にローテーションを行います。クラスが入れ替わることで、新たな気持ちで取り組むことができます。
- ・担任でない週には職員室で給食をとるなど、ちょっとしたリフレッシュの機会にもなっています。また、通院や看護休暇等もとりやすいです。



**【異なる、多くの視点で見守る】**

- ・各学年で大型モニターを活用し、チーム内での情報共有や共通実践を図っている。
- ・気になる生徒の様子が見受けられれば、直ぐに情報を共有し、学年全体で様子を見守る体制をつくる。



**【教職員の JOT・資質能力の向上】**

- ・担任でない週は先輩教員から学ぶ機会が多い。
- ・相互授業参観等、自然に他の教員が授業や学級の活動をしている教室に入れる雰囲気、以前よりも高まっている。

**(3) 生徒参画型学校運営の進展**

- ・校則見直しを含め、生徒会が校長室でプレゼンをし、承認を得る仕組みを導入。
- ・委員会活動や行事における役割を拡大し、主体的な参画を促す。
- ・フォーサイト手帳の活用による「振り返り」と「見通し」の習慣化。

**(4) 「問い」を軸とした授業づくりの推進**

- ・単元を貫く問いの設定、「学習課題」から「学習問題」への発展。
- ・ICT活用による思考の可視化と対話型授業の促進。
- ・校種、教科横断で学習過程の統一モデルを検討。

(5) 安心の居場所づくり

## ふれあい教室

自分の目標を見つけられる  
みんなのとまり木



☆ふれあい教室の目的

生徒が夢やなりたい自分に向かって進んでいくためには、心理的な安全や社会とのつながり、自己承認欲求が満たされる必要がある。そのため、「子供が学校に適應するのではなく、学校が子供に適應していく」を基本理念として、不登校・不登校傾向の生徒の居場所として、多様な学び方、過ごし方を認めていく。

☆対象としている生徒

- ・登校したり、教室に入ったりするのが難しい生徒
- ・一時的に休憩が必要な生徒
- ・自分のリズムで過ごしたい生徒

☆現在行っている対応

- ・登下校時刻を自分で決める
- ・隣接する第三地区センターでの個別学習
- ・他の生徒や教員との交流
- ・個人スペースでのクールダウン

登校を目標とする生徒も、休憩で1時間だけ利用する生徒も、自分の目標をもとに1日の活動を自己決定し、小さな成功体験を積み重ねる場としてふれあい教室を利用する。



(6) アンケートデータから見る生徒の変容（添付データより：生徒アンケート）

○特に伸びが大きかった項目

No.	項目	5月	11月	変化
19	友達との困り事を自分で解決しようとする	75%	97%	+22%
13	よりよい学校づくりに進んで関わる	78%	86%	+8%
14	行事に前向きに取り組んでいる	87%	93%	+6%
12	自分たちで学校を創る意識	85%	89%	+4%

→「自律的な行動」と「学校参画の意識」が確実に向上している。

○ICT活用・授業面でも安定

- ・「授業で自ら取り組んだ(9)」90%→91%
- ・「ICT機器を活用している(10・11)」ほぼ横ばいで高水準

●課題が見える項目

- ・フォーサイト手帳の活用(15・16) 下降
- ・他者から認められている実感(5) 下降
- ・相談相手の多様性→改善傾向だが継続課題

### 3 生徒・教職員アンケートから見た成果と課題

#### 【成果】

- (1) 教員の指導が一貫し、生徒に安心感を生む体制の確立  
ローテーションと木曜学年部会により、指導方針のズレが大幅に減少。
- (2) 生徒の自律・参画が向上  
項目 12～14・19 の伸びが顕著。  
生徒会、委員会が主体的に動き「生徒色の学校づくり」が進行。
- (3) 教員の心理的安全性・働きやすさの向上  
若手の学びの機会増、年休取得がしやすい環境づくりの前進。  
対話を中心とした授業改善のモデルが形成されつつある。

#### 【課題】

- (1) フォーサイト手帳の活用定着（項目 15・16 の低下）
  - ・見通しをもって行動する力が十分に育ちきっていない。
  - ・手帳の位置づけ再整理が必要。
- (2) 認知的・情緒的な「承認」の感じやすさが低下傾向（項目 5）  
多様な教員と関わるメリットがある一方で、深い承認を受けているという実感の薄れが見られる。
- (3) 教員の負担の偏り  
特定ケースでフォローが集中する課題は残る。  
学年主任、生徒指導担当の負担を分担する体制の再整理が必要。

### 4 その他

#### 【1年目の研究や実践から明らかになった課題】

##### <チーム担任制>

- ・「チーム担任制」は、生徒主体の学校づくりと並行して進めなければ、制度そのものにはほころびが生じ、成り立たなくなる恐れがある。そのためにも、生徒に「自己決定の場」を与える機会を今後さらに増やしていきたい。
- ・フォロー体制が必要な場面では、学年主任をはじめ、他の職員に負担がかかることもある。だからこそ、全員が担任であるという意識をもって取り組む。
- ・年休や介護、看護休暇などを取りやすくし、教員にとっても働きやすい教育環境の整備を進める。
- ・校長のリーダーシップのもと「生徒の自律とは何か」を教職員全員で問い続けていく。

##### <授業改善>

- ・「単元を貫く問い」を明確に設定し、生徒の予想や仮説を大切にしながら、単元全体を通して“追究してみたい”という意欲につなげていく。
- ・「学習課題」から「学習問題」へと発展させる授業スタイルを浸透させ、生徒の思考の流れを重視した授業改善を進めていく。
- ・各教科内で授業スタイルの定着を図るとともに、他教科でも共通する“問いを引き出す学習課題”の在り方を共有・研修していく。

<不登校対策>

- ・生徒や保護者に対して、「ふれあい教室」の目的や在り方をより理解してもらえよう、最適な周知方法を模索していく。
- ・一人一人の実態に応じた個別最適な評価（通知表等）の在り方について、今後検討を進めていく。
- ・地区センターでの活用の幅を広げ、地域の方々との交流や学び合いの機会につなげたい。
- ・「子供が学校に適應する」のではなく「学校と子供が共に適應できる関係」を築いていく。

校長会において指定校の取り組み(中間報告)



沼津市校長会で中間報告会を行った。登壇者は現校長、前校長、教務主任、学年主任の4人。当日は市内の全学校にもオンラインでつないだ。

### 小中学校校長会で研究発表

三中で導入のチーム担任制

市立小中学校の校長会が11月12日、教育会館で開かれ、研究発表として「チーム担任制」についての発表が行われた。昨年度から三中で実施されている「チーム担任制」では、1学年2クラスを3人の教師がローテーションで、上週開講する1クラスを担当している。これについて、同校の山崎校長、前校長の渡邊義昭・静浦小中一貫学校長、三中の加藤匡泰教務主任、江島拓海学年主任の4人がシンポジウム形式で発表した。

#### 生徒の順応早く変化も 教師も手ごたえ、働き方改革に

三中で導入の前年の答えがあった。渡邊校長は「相談は「生徒達が感情をあまり表現しないこと、悩みを抱えてもいかに問題を解決していくか、生徒が適切なサポートを求めている」として、

「助けて」と言えないことなど、問題意識を保持したと、アポイントメントを、困った時に相談できる人がいない、相談できない」と

自分の意見を持ち、多様性を認め合えるようになるには、大人側のかかわり方を変える必要がある」として、「全ての教職員で、全ての生徒を多面から見つめて育むため、チーム担任制を導入することを決めた。また近年の子ども

の傾向として、「当事者意識が弱く、誰かがやってくれるだろうという空気がある」「同調圧力によって周りの合わせるような様子が見られる」と捉え、「自律」を目標とする。昨年度、同校では昨年度、受験を控えた3年生は従来の担任制として、1・2年生でチーム担任制を導入。今年度から全学年で採用した。

3学年いじめも4

を挙げた。行事の際に教師に頼ることなく、新卒の教師も1人で対応し、精神的に追い詰められる教師も少なくなっている。

加藤教務主任は「教師の役割は生徒が自己判断するために材料を与えること」として、「担任である自分の学級で、原則として1週間ごとの主役の学級であり、ローテーションで担任となり、朝や帰りの会、給食等を共にするが、細かいことについては生徒が自覚を促すようにしている。

3人のうち「窓口」となる教師が決められていて、保護者からの問い合わせなどは、教育相談（三者面談）も担当。ただし、生徒の希望に応じて他の教師も相談にのる。

加藤教務主任は「教師には、それぞれ特性や強みがあり、それを発揮できる体制」だと指摘。教師達からは「働きやすくなった」と喜んでいたり、多様な手段の可能性を示唆した。

沼津朝日新聞社  
〒410-8888 沼津市末広町34  
TEL 982-4340 FAX 982-4590  
URL numaasa.com  
1ヶ月 730円・1部 40円

外科・整形外科・リハビリテーション科  
フジ高砂クリニック  
沼津市高砂町一五(高砂公園西側)  
診療時間 月～土 午前9時～午後5時  
日・土曜日は午後休診  
本館 沼津 高砂 休診  
TEL 941-5684

静岡県教育委員会研究指定校

「令和7年度 チーム担任制の導入による指導・運営体制の充実に関する研究」

「令和7・8年度 誰一人取り残さない教育の実現に向けた授業づくり・学級づくり」

**本校の研究主題**

<中間報告>

**「多様性社会における生徒・保護者・教職員の信頼関係形成」**

**～ 一人一人を大切にする教育の実現 ～**



沼津市立第三中学校長 山崎 巖

静岡県教育委員会では、本年度、「未来を切り拓く人材の育成と社会を生き抜く力を育む教育の実現」に向けた理念と施策が示されました。その根底には、「自分の夢を実現し、幸せを実感できる 幸福度日本一の静岡県を目指す」という願いがあり、児童生徒一人一人の個性や能力を最大限に伸ばさせる教育の推進が掲げられています。

また、沼津市の次期「教育大綱」においても、「誰一人取り残さない教育の構築」が強調されています。このような大きな教育的潮流の中で、本校は県指定の調査研究事業を受け、今年度から2年間にわたり研究に取り組んでいます。

本校が進める研究の柱は、次の3点であります。

第一に、「チーム担任制」を基盤とし、生徒が多様性社会を生き抜くために必要な資質・能力について教職員が不断に問い続けること。チーム担任制は、生徒が安全かつ安心できる環境のもとで、自ら学級や学校を構築していくことを目指すものであり、生徒の「自律」を育む大切な仕組みと考えています。

第二に、「もっと知りたい、学びたい」という生徒の探究心に応える授業づくりです。そのため「学びの文脈を保障する授業」の実現を目指し、授業改善を進めていきます。

第三に、登校支援ルームを活用した「安心の居場所づくり」です。誰もが安心して登校できる環境の整備を重視しています。

今後、研究の過程においては、様々な課題に直面することが予想されますが、その都度、教職員間での対話を重ね、知恵を出し合い、試行錯誤を積み重ねていきたいと思っております。

本日は、その歩みの一端として、1年目の中間報告を申し上げます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

令和7年 11月 12日(水)沼津市立第三中学校

## 研究構想図

### <学校教育目標>

「確かな目標を持ち、自ら学び、自ら判断し、自ら鍛える生徒」

#### 学校経営目標達成のための「観」の共有

- 1 「教師からサポーターへ」よき支援者として
- 2 「今、君はどんな状態なの？君はどうしたいの？先生は何を支援すればよいの？」
- 3 「子供のためではなく子供の立場に立って」

### <研究主題>

「多様性社会における生徒・保護者・教職員の信頼関係 ～一人一人を大切にす  
る教育の実現～」

## 研究の視点

### ① 生徒参画の学校運営「チーム担任制」の導入

- ・「自分たちで創る学校」という意識の醸成
- ・「担任の色が反映されたクラス」ではなく「生徒自身の色で染まるクラス」＝自律
- ・学年団の組織を充実させ、生徒の情報共有を密に行い、様々な面から見取る。
- ・特別な支援を要する子どもに対して、多面的なアプローチをする。

### ② 学びの文脈を保証する授業づくり

- ・単元を構想し、課題をつかむ授業を意図的に設ける。
- ・「学習課題」から「学習問題」へ。生徒と教師の問い掛け合いや教師の問い直し、生徒の自己内対話を言語化し、「学習問題」につなげる。
- ・「三中スタンダード」の「課題をつかむ」に重点を置く
- ・「探究」をキーワードに授業改善を推進する。

### ③ 安心の居場所づくり

- ・「ふれあい教室」の運営理念の改革
- ・子供が学校に適應するのではなく、学校と子供とで適應できるように共に考える
- ・できること（登下校時刻、個別学習、交流、クールダウン等）を自分で決める。
- ・自分の目標を見つけられる、「みんなの止まり木」でありたい。

## 社会を取り巻く教育課題（文科 HP）

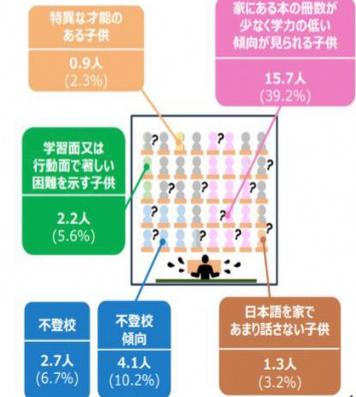
### 学校における児童生徒の多様性を包摂する必要性

○どの学校においても、多様な個性や特性を有する子供が在籍している実態が顕在化している。こうした多様性を包摂し、一人一人の意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題。

#### 小学校（35人学級）



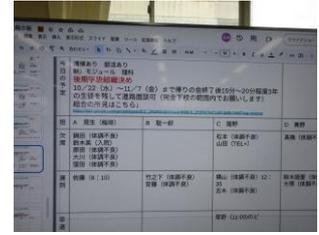
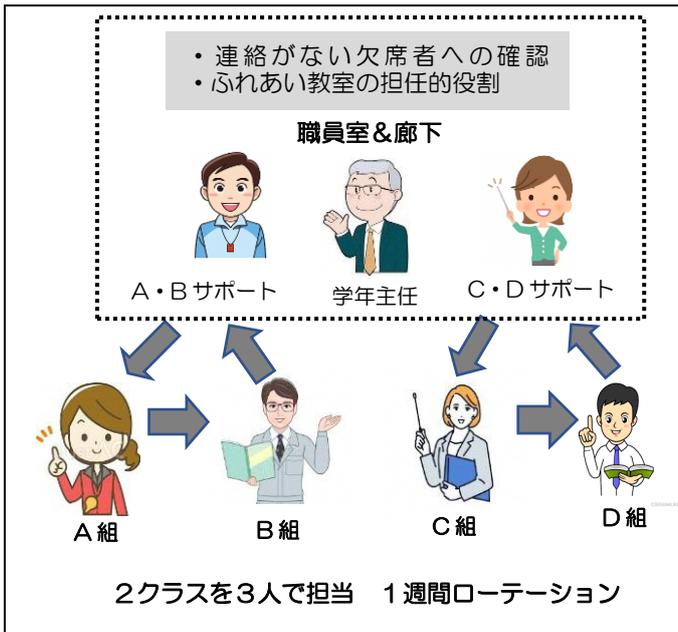
#### 中学校（40人学級）



## 今年度実施した、本校の校内研修の主な取組

- ・「チーム担任制」評価アンケートの分析・評価・対策・改善（様々な部会で数値をもとに、その都度検討を行っている。PJチーム、中堅研チーム、主任会、アフターファイブ研修等）
- ・生徒の自律を促す、効果的なフォーサイト手帳の活用（全校生徒と教職員が共に研修）5/15
- ・「自ら」について 市教委と共に三校合同研修会 6/23
- ・創価大学教職大学院 渡辺秀貴教授「どの子も分かる、できる授業を目指して、学びに向かう力を育てる授業改善」三校連携プロジェクト 7/28
- ・「ICTを活用した魅力ある探究的な授業づくりについて AIの活用」 静岡大学 塩田教授 10/14
- ・レジリエンスの育成 ペップトーク講演 岩崎由純氏「やる気を引き出す、魂を揺さぶる」12/19

## チーム担任制を軸とした取組み



### 【異なる、多くの視点で見守る】

- ・各学年で大型モニターを活用し、チーム内での情報共有や共通実践を図っている。
- ・気になる生徒の様子が見受けられれば、直ぐに情報を共有し、学年全体で様子を見守る体制をつくる。



### 【教職員のOJT・資質能力の向上】

- ・担任でない週は先輩教員から学ぶ機会が多い。
- ・相互授業参観等、自然に教室に入れる雰囲気がい以前よりも高まっている。

### ～働きやすさ～



- ・木曜日に学年部会を行い、金曜日にローテーションを行います。クラスが入れ替わることで、新たな気持ちで取り組むことができます。
- ・担任でない週には職員室で給食をとるなど、ちょっとしたリフレッシュの機会にもなっています。また、通院や看護休暇等もとりやすいです。

## 授業づくり 子供の問いを引き出す学習課題の探究

子供の思考のずれが生まれる学習課題

学習問題

子供の言葉から学習問題が生まれる

子供の思考を可視化することで学習問題が生まれる

### 【三中スタンダード】

- ① 課題をつかむ → R7 重点項目
- ② 個で学ぶ → 個で学ぶ時間の確保
- ③ 仲間と学ぶ → 意図のある交流
- ④ 学習を振り返る → できるようになったこと

### <R6 研修の重点>

単元の目標を達成するため意識した単元構想に重点を置く。

### <R7 研修の重点> 小中連携で取組み

- ・子供たちが抱く問い【学習問題】をつくることで主体的な学びにつなげる。

【学習問題】は子供から突然生まれるものではないため、単元や授業の始まりに教師が提示した問い【学習課題】から、子供と教師が問い掛け合ったり、教師が子供に問い直したりすることで、子供の自己内対話をつなぎ、言語化していくことで【学習問題】が生まれるような導入を意識する。

## ふれあい教室

自分の目標を見つけられる  
みんなのとりまき



### ☆ふれあい教室の目的

生徒が夢ややりたい自分に向かって進んでいくためには、心理的な安全や社会とのつながり、自己承認欲求が満たされる必要がある。そのため、「子供が学校に適応するのではなく、学校が子供に適応していく」を基本理念として、不登校・不登校傾向の生徒の居場所として、多様な学び方、過ごし方を認めていく。

### ☆対象としている生徒

- ・登校したり、教室に入ったりするのが難しい生徒
- ・一時的に休憩が必要な生徒
- ・自分のリズムで過ごしたい生徒

### ☆現在行っている対応

- ・登下校時刻を自分で決める
- ・隣接する第三地区センターでの個別学習
- ・他の生徒や教員との交流
- ・個人スペースでのクールダウン

登校を目標とする生徒も、休憩で1時間だけ利用する生徒も、自分の目標をもとに1日の活動を自己決定し、小さな成功体験を積み重ねる場としてふれあい教室を利用する。



## 本校の研究や実践から明らかになった課題

チーム担任制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「チーム担任制」は、生徒主体の学校づくりと並行して進めなければ、制度そのものにほころびが生じ、成り立たなくなる恐れがある。そのためにも、生徒に「自己決定の場」を与える機会を今後さらに増やしていきたい。</li> <li>・フォロー体制が必要な場面では、学年主任をはじめ、他の職員に負担がかかることもある。だからこそ、全員が担任であるという意識をもって取り組む。</li> <li>・年休や介護、看護休暇などを取りやすくし、教員にとっても働きやすい教育環境の整備を進める。</li> <li>・校長のリーダーシップのもと「生徒の自律とは何か」を教職員全員で問い続けていく。</li> </ul>
授業改善	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「単元を貫く問い」を明確に設定し、生徒の予想や仮説を大切にしながら、単元全体を通して“追究してみたい”という意欲につなげていく。</li> <li>・「学習課題」から「学習問題」へと発展させる授業スタイルを浸透させ、生徒の思考の流れを重視した授業改善を進めていく。</li> <li>・各教科内で授業スタイルの定着を図るとともに、他教科でも共通する“問いを引き出す学習課題”の在り方を共有・研修していく。</li> </ul>
不登校対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒や保護者に対して、「ふれあい教室」の目的や在り方をより理解してもらえるよう、最適な周知方法を模索していく。</li> <li>・一人一人の実態に応じた個別最適な評価（通知表等）の在り方について、今後検討を進めていく。</li> <li>・地区センターでの活用の幅を広げ、地域の方々との交流や学び合いの機会につなげたい。</li> <li>・「子供が学校に適応する」のではなく「学校と子供が共に適応できる関係」を築いていく。</li> </ul>

今後の学校運営の参考にしたいと思っておりますので、右の二次元コードよりアンケートへの御回答をお願いします。なお、お忙し中、大変申し訳ありませんが、11月21日(金)までに御回答いただきますようお願いいたします。



# 生徒

## 令和7年度 11月 誰一人取り残さない生徒アンケート集計用紙

赤字:11月に修正 青字:旧アンケート

保護者全体		5月(第1回)	11月(第2回)	変化
		肯定%	肯定%	(±)
1	チーム担任制を通して、いろいろな先生と接したり、話したりする機会を増やすことができた。	91%	94%	3%(↑)
2	教育相談などを通して、いろいろな先生と接したり、話したりする機会を増やすことができた。	82%	85%	2%(↑)
3	困ったときに、先生方は話に耳を傾けたり、あなたの思いに共感したりしてくれている。	94%	90%	4%(↓)
4	あなたは他者のことを認めている。	98%	96%	2%(↓)
5	あなたは他者から認められている。	91%	86%	5%(↓)
6	あなたは自分自身で考えて行動している。	94%	94%	0%
7	あなたには相談できる人(先生や友達、家族など)はいる。	96%	96%	0%
8	あなたは学校で安心して過ごすことができている。	93%	94%	1%(↑)
9	授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自ら取り組んだ。	90%	91%	1%(↑)
10	授業で、先生はICT機器を用いてわかりやすい授業に努めている。	95%	96%	1%(↑)
11	授業では、自分の学びを深めるためにICT機器を活用している。	91%	91%	0%
12	自分たちで創る学校や学級を意識して生活している。	85%	89%	4%(↑)
13	よりよい学校や学級を創るために自分から進んで関わろうとしている。	78%	86%	7%(↑)
14	ワクワクする学校や学級づくりに向けて、委員会や行事に前向きに取り組んでいる。	87%	93%	6%(↑)
15	フォーサイト手帳は、自分を知る・振り返る手段となっている。	79%	68%	11%(↓)
16	フォーサイト手帳を使うことで、見通しを持った生活を送ることができている。	71%	66%	5%(↓)
17	今、なりたい自分の姿や目標をもっている。	76%	75%	1%(↓)
18	担任の先生が変わっても、クラスのルールは変わらない	90%	90%	0%
19	友達との関係で困ったことがあるときは、自分で解決しようと努力している。(5月:頼れる先生に相談して解決しようと思う)	75%	97%	22%(↑)
20	自分は、いろいろな先生たちと関わっている	82%	84%	2%(↑)
21	先生たちは、それぞれ自分に関わってくれる	90%	88%	2%(↓)

22	先生たちはみんな、自分を育てようとしてくれているように思う	93%	92%	1%(↓)
23	クラスでの活動を通じて、いろいろな先生の考え方に接することができる	93%	95%	2%(↑)
削除	いろいろな先生に相談できる	73%		
NEW	窓口担当以外の先生とも気軽に話ができる		87%	
削除	自分のことを理解してくれる先生がいる	92%		
削除	先生たちは信頼できる	91%		
NEW	困った時や相談したい時に頼れる先生がいる		88%	

# 教員

## 令和7年度 11月 誰一人取り残さない生徒アンケート集計用紙

赤字:11月に修正 青字:旧アンケート

保護者全体		5月(第1回) 肯定%	11月(第2回) 肯定%	変化 (±)
1	昨年より他教員との意見交換や情報共有が活発になったと感じる。(5月:以前より他教員へのコミュニケーションが増加している)	84%	84%	0%
2	他教員と生徒指導や授業に関する情報共有を定期的に行っている。(5月:他教員へ積極的にコミュニケーションを図っている)	92%	92%	0%
3	昨年(前任校等)と照らし合わせてみると、チーム担任制になったことで生徒支援の問題の改善が見られる。	84%	96%	12%(↑)
削除	子どもたちが落ち着いたと思う。	52%		
5	学年として子どもを育てようとしている。(5月:学年の子供たちと広く関わっている)	76%	96%	20%(↑)
6	当初思っていたより実施している学年の教員の状況を見ていると職員室での教員の雰囲気もよく、教員の適応はできている。	100%	96%	4%(↓)
7	固定担任制では、不安や悩みを抱えることもあったが、チーム担任制では他の先生に相談しやすく、安心して指導できる。	92%	92%	0%
8	今までは担任だけで対応していたため、精神的に負担が大きかったが、他の教員と協働できるため精神的な負担が軽減できる。	88%	92%	4%(↑)
削除	9教員同士の助け合いに、まだ課題が見られる。	92%		
10	生徒理解においてチームビルディングの考え方が十分に伝わっていないので、一部の教員に負担がかかりそうである。	68%	76%	8%(↑)
11	学年でより周りを見て支え合い、迅速にサポートできるような関係性が図られている。	96%	92%	0%
12	教師間の交流を十分にする方法を通じて、子どものつまづきや、つぶやきを共有することができている。	100%	96%	4%(↓)
13	生徒に関しての情報共有など、時間の確保ができています。	76%	84%	8%(↑)
14	配慮が必要な生徒が、多方面から見つめ育むことができている。	80%	96%	16%(↑)
15	子どものいろいろな場面での善し悪しの発見ができ、一人ひとりの理解につながっている。	96%	100%	4%(↓)
16	配慮が必要な生徒が、支援を求めやすい環境が図られている。	92%	96%	4%(↑)
17	生徒から学習問題を引き出す授業づくりを実践できた。	63%	75%	12%(↑)
18	授業で生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。	71%	83%	12%(↑)
19	授業でICT機器を活用している。	80%	92%	12%(↑)
20	授業中に、生徒は自身の学びを深めるためにICT機器を活用している。	79%	91%	12%(↑)
21	各プロジェクトで、生徒が誰一人取り残されないような、取り組みや提案が行われている。	92%	96%	4%(↑)